

## 2020年度 一般社団法人日本社会福祉学会 学会賞受賞に寄せて

学会賞審査委員会による審査の結果、2020年度の学会賞が決定し、学術賞(単著部門)として鈴木浩之会員、奨励賞(単著部門)として大嶋栄子会員が選ばれました。

授賞式は、第68回秋季大会二日目の2020年9月13日に、開会式に引き続いてオンラインにて行われました。

受賞された方々からの喜びの声をお届けします。



### ◆ 学術賞(単著部門) 鈴木 浩之(立正大学)

受賞作:『子ども虐待対応における保護者との協働関係の構築

——家族と支援者へのインタビューから学ぶ実践モデル』

(明石書店、2019年12月12日刊)



名誉ある学術賞をいただきとても感激しています。と同時に、私などが受賞してよいのかという気持ちもあります。

本研究は神奈川県の子童相談所(以下児相)在籍当時にまとめたものです。児相はとても忙しく、今思えば3年間でよくまとめたと思います。現場にいと、とても大切なことを、子どもや家族、実践者から教えてもらうのですが、日々の忙しさと、大切な何ものかを、言語化する術が見つからないため、これまでたくさんの大切な事象をやり過ごしてしまっていたと思います。そんな時、児相の職歴の最終盤に「職権で一時保護された家族」から、お話を聴かせてもらったならば、子ども虐待対応において保護者と児相がパートナーシップを築くためのヒントがもらえるかもしれないという思いに至りました。

定年前にまとめができればよいとの思いもあり、通勤途上にある東洋大学の後期課程に通うことにしました。ここで、志村先生からクラシックグラウンデッドセオリーの手ほどきを受けました。このことを通して現場の中にあつたとても大切なものの輪郭が少しずつ見えてきました。その後、実践者に対してのインタビューを分析し、両者を比較しました。また、児相の職員に対するアンケート調査を統計的に分析すると、質的研究とは異なる角度から、現場にある事象を読み取ることができました。あとは、それらを比較することを続け、見えてきた範囲の中で実践モデルをまとめたのが研究のあらましです。

社会福祉実践を研究するというのは現場の経験を研究という虫眼鏡を使って新たな見え方を探すもののように思います。実践と研究は不可分なのだと思ひました。

研究は私だけがまとめたものではありません。児相への怒りも残る保護者に児相への批判も含めてお話を聴かせていただくことを許可してくれた神奈川県児相の判断がなければ研究は始まりませんでした。さらに、貴重なお話をまとめるための研究方法は大学での教えがなければ形にはならなかったと思います。ゼミ生との意見交換も常に刺激でした。事務室にいけばいつも「大学はいかがですか」と声をかけていただきました。何より、本研究は、とてもつらい体験であったはずの職権により一時保護される体験を率直に話して下さったご家族の協力失くしては実現しなかったと思います。休みの時は部屋にこもることを許してくれた家族にも感謝いたします。

多くの人との協働作品である本研究の受賞の喜びをかみしめ、これからも現場に貢献できる仕事を続けることの糧とします。ありがとうございました。

### ◆ 奨励賞(単著部門) 大嶋 栄子(特定非営利活動法人リカバリー)

受賞作:『生き延びるためのアディクション

——嵐の後を生きる「彼女たち」へのソーシャルワーク』

(明石書店、2019年10月20日刊)



事務局から電話をいただいたとき、私は運営するカフェでテイクアウトのお弁当を作っていました。2002年の開業以来、心を深く病む人が生きる力を取り戻すうえで欠かせないものとして「食」を捉えてきましたが、ソーシャルワークの仕事として食に関わるなど、医療機関で働いていた時の自分には想像出来ないものでした。

身体へのアプローチも、それまで私が日本で学んだテキストの中にはほとんど見られないものでした。ただ、米国での留学生活の中でインターンを体験したのですが、そのときの私にいろいろなことを教えて下さったスーパーヴァイザーが、「クライアントが自分の身体に目をかけることはとても大切な、自分の身体を感じないようにしているから」と話してくれました。私はそのとき、配偶者やパートナーから激しい暴力を受け、小さな子供を育てるシングルマザーが子供を育児放棄しないよう、コミュニティで支えるプログラムでインターンをしていました。ヨガやストレッチ、そしてマッサージ。オーガナイザーとしてのソーシャルワークを学んだ時期でした。

私が病院を離れ、地域で激しい暴力の被害体験を背景にもつ女性の支援を始めたのは、PTSDという精神疾患の枠組みでも、DVシェルターという緊急避難の枠組みでもなく、「生き延びるためのアディクション」という現れ方に着目したからでした。精神科医療にあって辺境ともいわれる依存症の治療や援助のなかに、私は社会の中で最も虐げられてきたひとの暮らしがあると感じました。けれども具体的にどうすれば彼女達の回復に寄与出来るのかがわかりませんでした。そこから、私の学びと研究が始まります。

指導教授と研究室の仲間達は、私にとってピンボールの相手のようでした。私がぶつかる問いに対して本が投げられ、読み進める中で新しい問いにぶつかると、今度は別の本や論考が私に投げつけられる。この本はそうやってようやくまとめられた博士論文が下敷きとなっています。受賞を最も喜んだのは、この本のなかに登場する女性達、そして私の仕事を支えてくれる多くのスタッフと友人達でした。彼女達はいずれも無名で研究という場にもいないのですが、私にとってかけがえのない共同研究者です。現在もフィールドでの問いは絶えることはありません。受賞を励みとして、これからも発見を精緻な言葉としていく作業に取り組んでいきたいと思います。